

2018年度商学部専門科目「経営史」

本授業のガイダンス、「経営史を学ぶ意味」について

本日の目標

本授業の狙い、内容、評価方法等を説明すること、そして歴史とは何かを踏まえつつ、経営史の一般をお話して、次回以降の講義へのつなぎとすること。

講義内容

1 本講義の狙い/2 本日の授業内容/3 今期の経営史の授業計画案/4 テキスト/5 評価方法/6 参考文献

1 本講義の狙い

本日配布、差し替えた今年度のシラバスより

「経営史とは、そうした企業の事業継続性をいかにして高めることができるのかに対して、歴史的な視点から回答しようとするものである。具体的には、現在の企業経営が有する課題を把握し、なぜそうした課題を抱えることになったのか、その起源を追求することで、事業継続性を高めることを目指すものである。」

そもそも経営学とは何か…(1)事業継続性の向上

⇒歴史の側面からの接近

※なぜ事業継続を追求するのか

…経済的・社会的基盤、生業（なりわい）；経営者、労働者、株主、地域社会

2 本日の授業内容

2.1 キーワード

危機/事業継続/相対化/歴史的事実

2.2 企業経営の捉え方

第87回日本経営学会大会での報告について（テキスト 1-2 頁）

統一論題「経営学の学問性を問う」のサブテーマ「②危機の時代の企業経営」

プログラム委員会からの報告要請

「第1の柱が国・地域という空間的異同に照射したテーマであるとすれば、第2の柱は、時間軸的視点から、昨今の「危機（crisis）の時代」にスポットライトを当てようとするものである。ここ数年、世界の企業経営はさまざまな「危機」に瀕しているとされ、アメリカのサブプライムローン問題に端を発する世界金融危機、欧州通貨の価値が崩壊するユーロ危機、さらには東日本大震災に伴う原発問題に端を発するエネルギー危機、タイの洪水被害にみられるような自然災害に伴う危機など、枚挙に暇がない。こうしたさまざまな危機の時代に、個々の企業はどのような対応をなし、また経営学は、こうした危機に対しどういった対策を導出できるのか。これらの点について検討しようとするのが第2の柱である」（日本経営学会、2013）

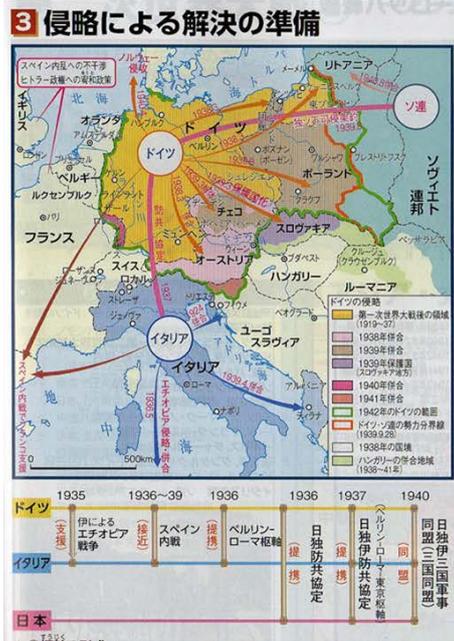
現在は、本当に「危機の時代」なのか→「成功」しようとしている企業の存在（DVD）

⇒周囲の環境の変化（「外部条件の悪化」）による「リスク」の高まりではないか

2.3 「危機」とは何か

（例）第1次世界大戦後、敗戦国ドイツから生まれたナチスの台頭による世界戦争への瀬戸際（カー）
（資料1）

資料 1



ファシズム国家(全体主義国家)の動き				国際関係
ドイツ	イタリア	日本	対外事項	
1918 ヴァイマル共和国成立	19 フィウメ占領			
19 ドイツ労働者党結成(ヒトラー入党)	北イタリアで労働者による工場占拠(~20)			
20 ドイツ労働者党が国民社会主義ドイツ労働者党(ナチ党)と改称	21 ファシスト党結成			
21 ヒトラー、ナチ党首となる	22 ローマ進軍		21 日英同盟解消	
ナチ党突撃隊(SA)創設	ムッソリーニ、政権奪取		ワシントン会議(~22)	
23 ミュンヘン一揆(→失敗)	28 ファシスト党独裁確立	28 張作霖爆殺事件	22 ソ連邦成立	
ナチ党親衛隊(SS)創設	28 ドイツ、国際連盟に加盟		28 不戦条約(ケロッグ-ブリアン協定)	
○共産主義者指導のセネスト爆発				
26				
1929 世界恐慌始まる				
32 ナチ党、第一党となる(過半数達せず)	31 満州事変	31 フーヴァー-モラトリアム(米)		
33 ヒトラー内閣成立(ヒンデンブルク大統領、ヒトラーを首相に指名)	32 満州国を建国	32 ウェストミンスター憲章(英)		
国会議事堂放火事件	33 国際連盟脱退	32 リットン調査団		
→共産党解散		33 国際連盟脱退		
全権委任法(ナチス、独裁権確立)	34 ワシントン海軍軍備制限条約破棄	34		
第三帝国成立 国際連盟脱退		34		
34 ヒトラー、総統(フューラー)に就任	35 エチオピア戦争	35 ストレザ会議(英・仏・伊)		
35 ザール編入 再軍備宣言	36 エチオピア併合	35 コミンテルン第7回大会(ソ)		
徴兵制復活 英独海軍協定		人民戦線結成(仏、社会党・共産党・急進社会党)		
36 ラインランド進駐(ヴェルサイユ条約、ロカール条約破棄)		36 ブルム人民戦線内閣(仏)		
四か年計画始まる		36 ス페인内戦始まる		
36 ベルリン-ローマ枢軸成立	36 日独防共協定→37 日独伊防共協定			
38 オーストリア併合	37 国際連盟脱退	37 盧溝橋事件		
ミュンヘン会議→スデーデン地方併合	39 アルバニアを併合	→日中戦争		
39 独ソ不可侵条約		→第二次世界大戦始まる		
ポーランド侵入				

出所) 帝国書院 (2014)。

ナチスドイツの掲げた優性政策⇔多様性, 寛容性

⇒「危機」

…(2) 内的な要因による存在そのものの消滅 の高い可能性

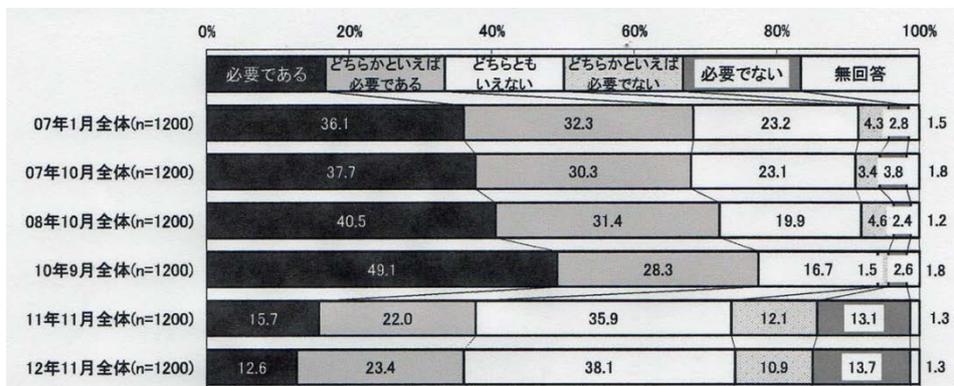
2.4 「企業経営の危機」

①日本の 10 電力会社の経営行動に対する日本社会の反感

原子力発電再稼働に執着, イノベーションを起こさないイメージ

⇒「3.11」以後の日本社会における原子力発電に対する態度 (資料 2)

資料 2



出所) 日本原子力文化振興財団 (2013)。

②エレクトロニクス産業におけるリストラの連続

グローバル競争で敗退してリストラ

⇒企業経営に対する冷やかな日本社会の反応 (資料 3)

資料 3

「私, 川野さんにはいったんです。そんなことするの, やめたらって。でも, 彼女はどうしても, 真

藤部長に恨みをぶつきたいって、そういいました。だったら、それもいいかなって」/真剣な眼差しが、不意に児玉を射た。思わず、背筋を伸ばしたくなるような、鋭さだ。/「私がそう思ったのは、そうすることで真藤部長に銀行という組織で働くということは何なのか、考えてもらいたかったからです。真藤さんは、自分の名誉だかプライドだか、あるいは出世だかのために、川野さんを貶めた。たったひとりの人間の自尊心のために、同じ銀行で働いている、家族も将来もある人間がだめになっていく。いつから銀行はそんな職場になったんでしょうか。出世のために人を蹴落としてなんとも思わない。そんな人が経営する銀行に、社会の役に立つことができるんでしょうか？私がいいたいの、そういうことです。この銀行には大勢のひとが働いています。出世や銀行の利益のために、そのひとだけでなく家族の幸せまで奪う、そんな組織にして欲しくない。そう思ったから、あの彼岸花、一度だけ送ったらっていいました。もしそれで真藤さんが気づいてくれたら、もう二度と、彼女は過去を振り返らない。そう私と約束したんです」/児玉ははっとしたまま、瞬きすら忘れて相手の言葉をきいた。中窪もまた啞然とした表情で彼女を凝視している。/ふと、児玉は彼女がつけているネームプレートを見て、はっとなった。花咲。「こいつかー」(池井戸, 2011, 327-328 頁)。

…日本企業に対する信頼の揺らぎ

→存在が危ぶまれる

⇒ **(3) 社会的認知の喪失**

…企業経営の「危機」

※なぜこうなってしまったのか、を探る

2.5 経営史の進め方

2.5.1 歴史について

編年史(＝年表のような「事実の羅列」)ではだめ⇒教訓となりえない

既知の知識が未知の情報に「転化」して、現代の歴史家が

「発見」し、「感じた」ことを

意味あるものとして

未来への展望を含む

適切な流れをもった

(4) 「歴史的事実」=ストーリー (テキスト 5 頁)

とりわけ、現在および将来の企業経営にとっての経営史ではなおさら

「現在」までのプロセスを丹念に探ることで、なぜ「現在」のようになったのかをつかむ…因果関係の把握

歴史家の主観⇒ **(5) 歴史家ごとの異なるストーリーの登場**

1 つの出来事に対する異なった立場からの異なったストーリー

VTR をめぐる複数の企業のストーリー (テキスト 6-7 頁)

歴史は科学たりうるか

教訓を得ようと他に応用しようと一般化を図るもの

自然科学のように繰り返しは起こらず、「客観的」ではない

⇒歴史学、現代史は科学性をどのように担保するのか

認識者による認識対象との **(6) 相対的な距離の確保** (資料 4) (テキスト 8 頁)

資料 4

現代史では認識者が認識対象との間に距離をとりにくい、という場合の「距離」とは、空間的・時間的距離のことではなく、精神的意味での距離です。出来事からの時間的距離が短いこと、メディア技術の空前の発達が出来事との空間的・時間的距離観を一変させていること、それらが対象にたいする認識者の精神的距離を大きく左右していることは日常的に経験するところですが、本来的には、ここでの「距離」とは、認識者が対象にたいして持つ知的・心理的距離の感覚のことです。 / 一般に、認識、その成果としての知識は、理性（概念的思考の能力）の働きなしでは（それがすべてではありません）成り立ちえません。理性の働きは、認識対象をつきはなして（つまり精神的距離において）観察するという、非情なあるいは冷めた態度を前提とします。…歴史家の思考は、ある出来事の「結果」、歴史家を「なぜ」という問いへと誘う「結果」を所与のものとし、それを出発点として「なぜ」の解答を求めてより遠い過去へと遡及する一面をもちます…ところでこうした思考と記述の手順が成り立つためには、思考の出発点でありまた終着点でもある出来事を、たとえ歴史家の党派的・道徳的観点から見て到底容認できないものであっても、一応完結したものとして（それは宿命論に陥ることでは毛頭ありませんが）受け入れる用意がなければなりません。もし決着がついたものとして受け入れられないなら、あるいは対象である出来事を客観化できないなら、その因果関係の客観的な分析はできなくなるからです。（溪内、1995、213-4、217-8頁）

現代史では、自らも目撃者、関係者…現実を受け入れられるのか

「否定史観」「未練史観」の恐れ

主観と相対化との緊張関係

◎求められる「有意味の因果の連鎖」（資料 5、テキスト 8 頁）

資料 5

「歴史家は過去の経験から、それも、彼の手の届く限りの過去の経験から、合理的な説明や解釈の手に負えると認められた部分を取り出し、そこから行為の指針として役立つような結論を導き出す」（Carr, 1961, 邦訳 152 頁）のである。

(7)偶然、運命、「英雄」 には頼らない、適切で合理的なストーリーの構築

…同じ立場からの歴史的事実の優劣

2.5.2 経営史の特殊性

企業経営の多様性

生身の人間を対象

…多様な経営者⇒**(8)多様な「経営構想力」**

知覚、認識、総合、先見、構想（テキスト 16-17 頁）

◎単一のパラダイムでは捉えきれない

◎相対化が可能か→「英雄」としての把握の恐れ、利害関係の絡み

※現代を意識して、生産システムを対象とした一般化への議論

2.6 次回のキーワード

グローバル・ヒストリー/大英帝国/産業革命/経営的冒険家

3 今期の経営史の授業計画案

回数	月	日	曜日	時限	内容
1	4	13	金	4	ガイダンス, 歴史の方法
2	4	27	金	4	大英帝国とイギリス自立分散型生産システムの成立
3	5	11	金	4	イギリスからアメリカへの生産システムの伝播
4	5	17	金	4	アメリカの垂直統合型生産システム
5	5	25	金	4	元村田製作所大島幸男 氏ご講演
6	6	1	金	4	アメリカから日本への生産システムの継承と発展
7	6	8	金	4	日本の柔軟統合型生産システム
8	6	15	金	4	台湾東海大学劉仁傑先生ご講演
9	6	22	金	4	日本から分散型生産システムへの転換
10	6	29	金	4	新興国の分散型生産システム
11	7	6	金	4	新興国の生産システムから次代の生産システムへ, レポート提出
12	7	13	金	4	次代の生産システム
13	7	20	金	4	レポート発表会

4 テキスト

中瀬哲史 (2018) 『エッセンシャルズ経営史 第2刷』 中央経済社
(サブテキスト)

E・H・カー (1962) 『歴史とは何か』 岩波新書

溪内謙 (1995) 『現代史を学ぶ』 岩波新書

大河内暁男 (1991) 『経営史講義』 東京大学出版会

宮本又郎・岡部桂史・平野恭平 (2014) 『1からの経営史』 碩学舎

5 評価方法

出席点 (3点*3回+1点)、レポート (40点)、試験 (50点) 等で実施

※レポートについて

以下のレポートテキストから 1冊を選択して読んでレポートを作成

伊藤 章治 (2008) 『ジャガイモの世界史—歴史を動かした「貧者のパン」』 中公新書

太田省一 (2016) 『SMAPと平成ニッポン 不安の時代のエンターテインメント』 光文社新書

川北稔 (2014) 『イギリス 繁栄のあとさき』 講談社学術文庫

2018年7月6日金曜日 17時までに, 学生サポートセンターに提出

分量: レポート要約 400字+レポート本文 4000字

7月13日に優秀レポートの発表

7月20日金曜日の授業時に優秀レポート発表会

6 参考文献

日本経営学会 (2013) 「日本経営学会第87回大会論題趣旨」 <http://www.keiei-gakkai.jp/schedule/>, 2016/10/06

帝国書院 (2014) 『最新世界史図説 タペストリー』

日本原子力文化振興財団 (2013) 『平成 24 年度原子力利用に関する世論調査の結果について』 <http://www.aec.go.jp/jicst/NC/iinkai/teirei/siryu2013/siryu23/siryu1.pdf>, 2016/10/06

池井戸潤 (2011) 『不祥事』 講談社文庫

溪内謙 (1995) 『現代史を学ぶ』 岩波新書